

白金葎

5月号



令和元年5月発行

第98号

定例会句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

光 みち

六月二十一日（金） 第四正午～三時…当季雑詠五句
七月十九日（金） 第五正午～三時…蓮見船吟行五句
八月は休み

五月例会句会報 （19 / 5 / 17 10 名2欠）

光成高志

赤城山左右に長き青野曳く

山焼や輪廻転生の旗を張り

雪山の雪に灰色雲の影

莢豌豆摘めば次々目にとまり

ビニールハウス早苗の緑ぎつしりと

松村幸一

新樹夜となる図書館に居残れる

いつまでも生きたく泉去り難く

誰とでも明るく居たい五月かな

百歳がすぐに来さうな五月かな

境涯のふと俣ばるゝ簾かな

山焼きを終へ山水のうまきこと
どの家も巢燕のゐて夜の静か
お狩場の窓を覗けば姫女苑
暮れてすぐ蛙鳴き出す水の郷
柿若葉隣の主婦の大噓

飯田孝三

遺影やゝ寒れる給ひ額の花

転ぶなよ薔薇の垣隈公園坂

楠若葉手賀の沼面うす濁り

瘤白鳥一羽新樹の汀かな

天皇に余生ありたる行々子

増田陽一

元号変ピクルスの蓋開かぬなり

蛾の生れてペットボトルに羽音澄み

天体や新馬鈴薯に鉋の傷

春の目覚め貝殻骨と蝶図鑑

街道や町の中まで竹煮草

武者昭七

花冠編み込まれたる白詰草

田宮敦子

花散るや故人の便り来ず仕舞

たつた一輛のローカル線の薄明り

新元号令といふ字を憎みけり

紫の瑤珞懸けて皐月来ぬ

三叉の花の淋しや弥生尽

佐藤宏之助

水無月や景色遮る大櫓

吉羽多美子

菖蒲田の肥後と江戸とが競ひ合ふ

一筋の縄れもあらず神の滝

流鏑馬の少年落馬して泣けり

燕飛ぶ変電所にも餌がありて

梅檀の花に心を洗ひたり

浅野正美

人ごみの桜の中のひとりかな

武者正子

母の日にもらつて嬉しい孫の文

祭の日唇もて吹きぬ風車

塩つかむ手に気合い入る令和場所

ふらここの揺れを残して又あした

葉桜や八十路の墓参にぎやかに

青き背をのばし見据える目刺しかな

ちやぶ台に母のつくりし柏餅

平成の終わりの日にも春炬燵

草取りを終えて春雷ひびきけり

磯目健二

青田風バス停に立つ帰省かな

山の端に落日遠き青田波

枯れ葦原芽吹く新芽の逞しき

青風裏返る葉の白さかな

天つ日を掌に受く若葉かな

一句鑑賞

光成高志

流鏑馬の少年落馬して泣けり

宏之助

「算術の少年しのび泣けり夏」(西東三鬼)がすぐに思
い浮かびましたが、掲句は流鏑馬の少年が落馬して泣い
たというなんとも情けない情景の句です。現代では危な
いぞと世人の批難がそうです。流鏑馬と少年と結合さ
れただけで想像される世界が大きくて佳句になっている
と思います。

ふらここの揺れを残して又あした

正美

ふらここのブランコの雅語です。帰宅を急かす拡声器
の音楽が流れてブランコで遊んでいた子がいさぎよくブ
ランコを手放した時の揺れに着目した佳句です。揺れに
目もくれず「又あした」と言い放って駆けだした子が目

に浮かびます。そういう平和が続きますようにという作
者の願いや祈りは無論省略されていますね。

一句鑑賞

増田陽一

いつまでも生きたく泉去り難く

幸一

泉は「生命の泉」のように響く。山野の旅かまた生涯
の来し方か、その途中に立ち寄って憩う泉。滾々と湧き
尽きぬ冷水に手を浸して何時までも去り難いのである。
湧き続ける水のようにいのち生き続けたしと思う。生き
たく去り難く、と音韻の殊に優れて、「泉」を暗喩とした
象徴詩のごとき一句である。

天皇に余生ありたる行々子

孝三

天皇に余生ありたる、と言つてのけた手腕に敬服。近
世の記録には稀な出来事と言うし、戦跡に鎮魂の遍歴を
されたかの上皇に猶世間並みの安らかな余生があるのか
どうか。またこの行々子が何とも好い。ただこの鳥の鳴
声に世論の甲論乙駁を暗示したとまでは言いたくない。

天皇退位についての想いと季節感にぴたりなのである。

新元号の令といふ字を憎みけり

昭七

まことに、戦中年代にとつては、「命令」「威令」「号令」
「訓令」などの痛みが残っているのである。「令」につい
て広辞苑に先ず出る解は「命ずること」である。尤も「令
名」「令色」のように「良いこと、めでたいこと」という

解も載っているけれど、ようするに戦中に育ったものには掲句の気持は同感できる。

莢豌豆摘めば次々目にとまり

高志

莢豌豆のみどりは葉の茂みにまぎれていて、さて、摘み始めると葉の奥に隠れていた多くの莢が見えてくる。「次々目にとまり」で、あつ、ここにも、ここにも生っていた・・という、爽やかな収穫の嬉しさが伝わってくる、体験が新鮮に生きている句である。

一句鑑賞

夏の月狸のような猫走る

敦子

磯目健二

春は月に吠える魔性で身も細る恋の狂態を演じた猫も、夢の浮き橋も途絶える短夜の月のもとでは、飽食肥太、分福茶釜の狸の代役になれそうな風体で走っている。
新元号の令といふ字を惜みけり

昭七

新元号に和する声が世上高いなかにあつて、「令」の漢字の、たとえば命令・訓令・令状・号令・号令・伝令・軍令など、過去の国家至上主義盛んな時代の記憶に連なる語感とイメージから、新元号の一部に冠することに釈然とせず、憎しみまで覚えてしまう世代の人たちがいる。集団意識で一方向へ雪崩を打つ日本人の国民性を思うと、この嫌悪感は、健全のあらわれと評価されていいはず。

天皇に余生ありたる行々々

孝三

憲法上天皇は崩御まで天皇であり、それを誰も疑わなかった。平成三十一年、天皇は生前退位して上皇となり、国政の激務から解放されて余裕のある日常生活を送れることになった。予想しなかった退位を巡って国内外で様々な反響があつたが、それはあたかも初夏の川辺に満ちる葭切の姦しい鳴き声を連想させた。

天体や新馬鈴薯に鍬の傷

陽一

小惑星探査機「はやぶさ2」がめざした小惑星リュウグウは、地球から遙か二億八千キロ、直径僅か九百メートルの小天体だ。探査機が送ってきた近接写真には、表面めがけ銅塊発射してできた人工クレーターがはつきり写っている。それを見て、掘る鍬でついた傷の残った新ジャガそっくりと思つたのだ。宇宙に浮かぶ小惑星リュウグウで小芋や独楽を連想した人は多いと思うが、鍬の傷のある新ジャガとまで考えたひとは稀に違いない。

流鏑馬の少年落馬して泣けり

宏之助

選ばれて少年は馬上の武者装束も晴れがましく流鏑馬に臨んだが、的を射貫く前に落馬してしまった。猛稽古も空しく衆人環視の晴の舞台で失敗した口惜しさと恥辱に耐えかねて泣いてしまう。作者は一緒に泣する気持ちである。埼玉県毛呂山町の出雲伊波比神社では、祭礼

の奉納行事として氏子の少年による流鏑馬が举行される。
柿若葉隣の主婦の大噓

みち

初夏の日を浴びてつややかに光る柿の若葉は最高だ。う
つとり見とれていると、突然、葉蔭の向こうから隣家の奥
さんの大きなくしゃみの音。思わず陶酔から覚めて苦笑し
あら花粉症かしら？」と心配する。粋と野暮が瞬時交叉
する飄逸味の句。一茶に 春雨に大欠 おおあくび する美人か
な」という句がある。美人でもそう。ましてや；。

山焼を終へ山水のうまきこと

みち

野焼の猛火を狩って山野を走り回った勢子にとつて、
鎮火を見届けて初めて喉の渴きを癒やす清水の一杯は、
まさに極楽の甘露である。

樟若葉手賀の沼面うす濁り

孝三

我孫子の沼辺、特に手賀公園から大橋までは樟の街路
樹が多い。新緑の季節、公園入口から沼の入り江に通じ
る並木道は、樟の若葉が赤みを帯び、葉裏は深みどりで
風にそよぐと、じつに美しい。彼方に沼が望まれて誘わ
れゆけば、薄濁った晩春の沼が広がっていた。

ふらこの揺れを残して又あした

正美

ブランコで楽しく遊んで子供たちは、家に帰る時間と
なった。互いに手を振って別れたが、飛び下りた余勢が
残っていて、空のブランコは依然揺れている。遊び仲間

同士の約束の声が聞こえる、余情に満ちた句である。万
太郎の「竹馬やいろはにほへとちりぬるを」は追憶句だ
が、この句は今日明日の現在進行形の句である。

蘆花恒春園吟行句会報(19/5/5 7名

翌日が立夏の前日五月五日は風薫る快適な日になった。
十時過ぎに恒春園の竹林が見えて来る所まで来た。はや
宏之助さんが透垣を通してみちさんと挨拶している。正
門から入場してSC迄の道には石庭の波の如き渦巻きの
模様が生えつらえてあった。奥にたけ子さんが友を連れて、
又半寿さんが現れたので、早速名乗り合って、暫く竹林
の筈を見ていたら敦子さんが来たので一〇時半まで竹林
を吟行、後はめいめいが吟行することにして正午に愛子
夫人旧宅の句会場に集まることを約して別れた。私は下
見の時にじっくり見損ねた記念館の文献を展示ガラス越
に見つめて疲れた。蘆花がトルストイに会いに行つてモ
スクワ郊外のヤースナヤ・ポリヤーナの邸宅で五日間を
過(こ)しトルストイと大いに語り合つたという説明板を読
んだ。「君は農業をして生活できないか」「自家の解脱が
大事だ」というトルストイの言葉がその後の蘆花の生き
方を決定づけたという。この恒春園はその証であったの
だ。馬車に同乗している蘆花とトルストイ、御者役は三

女のアレキサンドラ嬢、撮影したのは夫人六二才という説明付きの写真を自分に引きつけて見て畏怖した。アンナカレーニナは二十歳の時に熟読したし、当時のみちさんに夢中で話した覚えがある。吟行録を脱線してしまつたが、もう少し書くと、蘆花の相模灘の落日の真似をして私の家からみた富士山に沈む夕日を書いて「屋根」に投稿したら、嘉悦三さんが一気に読めた、良かったよと云ってくれたこと、よく覚えてゐる。この単文は自然と人生の中の文章だったのだ。そして蘆花が出発した後に着いたトルストイの手紙が展示してあり、その端正な英文にも感嘆した。その中身を読んでいたら吟行できないと気づいて出たが、後ろ髪をひかれる思いであつた。ロシアでは二人の皇帝がいて民衆に思われていたらしい。ニコライ二世とトルストイ。余りにも偉大過ぎて制裁を科すことが不可能であつたという。愛子夫人は熊本県菊池市の出、兄嫁が住んでいる、初対面の来栖澄子さんの名は兄嫁と同じ、両方とも私はねえさんと呼んでいる。などこれもご縁のある方々に出会うのであろうか不思議である。これも蛇足。蘆花の没後愛子夫人は一〇年をここで過ごしたが、ゴミ焼却場の匂いも気になるし、広い屋敷を維持できなくなり東京市に寄贈したのであつた。都になって近接の土地を整備して六倍の広さになり、

これは六義園とほぼ同じ広さの公園となつていたのであつた。共同墓地の隣に兄の蘇峰が建てた蘆花の夫婦墓がある。東側は環八通りに他三方は住宅地に接する都民の憩いの場所になつており、当日野外音楽会があるらしく、準備をしている若者のグループがいた。犬を放すことのできるドッグランの広場もあつた。句会は半寿さんの句稿のコピーの労を煩わし更に司会してもらい私の珈琲ブレイクを挟んで歓を尽くした。

光成高志

筍の丈のまち／＼疎の林
竹皮をふりほどくかに今年竹
音もなく回りつゝ地に竹落葉
トルストイと馬車に同乗若楓
あぢさゐにありがとうの名若葉出づ
青芝の真中にテント張る家族
高遠小彼岸桜小ぶりの葉桜に
箒目はトンボの目玉竹の秋
菩提樹の花はまだじやと管理人
竹皮を脱ぎて真如の肌を見す
竹皮を脱ぎ親竹をはや凌ぐ
黒松の直幹が天を突く

佐藤宏之助

茅葺の蘆花の旧居に緑差す
耕しの土に還りし蘆花夫婦

光
みち

小牛ほどの犬連れ歩く子供の日
夏は来ぬ蘆花公園に深く入る

蘆花の農具手入れしてあり夏に入る

五月五日は蘆花の結婚記念日と

若葉なる菩提樹が門母屋かな

ごつごつの蘆花の墓石若楓

緑蔭の日の斑蜂のホバリング

田宮敦子

愛子夫人のオルガン古び初夏の風

夏落葉リード伸ばして犬走る

ライオン像撫でる子供の白いシャツ

雉鳩や掃き集めたる夏落葉

「みみずのたわごと」初夏の風吹く藁葺屋

青芝やキックスケート坂下る

愛子宅の間廊下や若葉風

林半寿

半ば皮脱ぎたる竹の青さかな

石楠花の蒼固くて影の濃し

緑蔭に腕の白きをんなめて

新茶酌むふたりに違ふ時流れ

母と子のボール蹴り合ふ春落葉

緑さす愛子の井戸の竹の蓋

硝子越しに歪んで見ゆる夏の色

若楓いつも閑かな夫婦墓

加倉井たけ子

蘆花旧居竹も皮脱ぐ日射かな

風薫る恒春園に地蔵尊

走り根や夫妻の墓碑に夏落葉

草茂る恒春園にドッグラン

蘆花・愛子旧居に菩提樹若葉かな

母の里にありしと思ふゆすらうめ

新緑や遠回りして恒春園

来栖澄子

入れ替はる竹の皮散る青さかな

はつ夏の雲ひき払ふ蘆花の墓碑

木漏れ日の風の何処かに薄暑かな

空耳か空の青さに不如帰

リュックからひよいと目深に夏帽子

青空の青深くなり夏は来ぬ

片蔭の石を椅子とす午後三時

受贈誌（令和元年東京クラブ五月号）

廃線のレールを埋めて草茂る

理佳江

馬車道に瓦斯燈点る春の宵

文男

折紙の兜も並ぶ武者飾り

武子

軸解くや鍾馗の髻の漆黒に

璃子

うすみどり残して煮ばや露を剥く

”

自衛する命と知りし桜花（あすか四月号）

山尾かつひろ

山尾かつひろの吟行ノート四月（野島崎）

レム睡眠てふ春眠のあとつら

光成高志

流れゆく花筏とは絵巻物

光 みち

春眠やゆりかごとなる鈍行車

”

鏡花断想（高野聖）― 霊水を祀るもの―

武者昭七

僕が初めて「高野聖」を読んだのは戦後間もなく中学生のときだったと思う。現実の生の裏側に現実の生よりもっと華麗でなまめいた世界があるのを知って世界が変わった。それにしてもなぜ薬売りは馬に変えられ、旅僧は難をのがれたのか。「道心堅固だったから」というありきたりの説明では納得できなかった。一つ家のおんなは明るく活動的である。自らを「おばさん」と呼び先に立つてずんずんと崖をくだる。僧との沐浴が楽しげでさ

えある。そして「だれも見えてはおりませんよ」と近々と肉付きのゆたかな裸身をよせてくる。おそらく薬売りはそれにはまったのだ。（聖水は時に個人の生はおろか一村全滅のごときおそるべき魔力を発揮する。）しかし旅僧をとらえたのは女の裸身ではなかった。「山の気か、女のおいか、いずれともわがちがいたいほんのりとしたいい香り」であった。それは白桃の花びらの中に包まれたような快樂であつたと僧はあとで回想する。僧はおんなのふりまいたよい香りのする花の中にじつと身をひそめ、温かい湯とよい香りとに包まれて果てしない時空を漂い出す。僧にとつて至福のひとつだ。それはかつて旅僧がずつぷりと身を包まれ浮き漂つたあの世界、母の胎内だ。生命の始原の世界である。おんなは単なる妖術つかいではない。奥深い森から流れ下る山の生氣と呪力を秘めた聖なる水を管理し祀る女性だ。それこそが「一つ家のおんな」の正体だ。沢庵にこだわる不具の少年はあるいは前世の旅僧であつたかもしれない。「龍潭譚」の少年は九つ罡の美女の白くゆたかな胸につつまこまれて正氣をとりもどす。聖なるものに身を寄せること、聖なるものにつつまこまれることは鏡花文学の永遠のテーマであつた。

（二〇一八・一〇）

蘆花にまつわる想い出

磯目健二

五月の吟行地が蘆花恒春園と聞き、徳富蘆花にまつわる想い出が次々に思い浮かんできた。蘆花が愛子夫人と六畳二間の古家を買って、東京市内から北多摩郡千歳村字粕谷へ移住したのは明治四十年。当時、粕谷は辛うじて駅馬車が日に何本か通るのみの僻地で、京王線建設工事の音が遠く聞こえてきたと、「みみずのたはごと」に書いている。私が初めて恒春園近辺へ行つたのは、もう六十年前だが、もちろん蘆花公園駅も千歳烏山駅も大昔にできていて、村落の面影は片鱗も無かった。蘆花は少年時代に愛読した。そのきっかけは古本屋の店頭で、蘆花全集がゾッキ本扱いでバラ売りされていたことだった。敗戦後二、三年の頃で、新制中学の生徒だった私は、下校の途中、古本屋によく寄っていた。欲しい本があつても金がないので、棚の本を眺めるばかりだった。ところが投げ売りの蘆花全集は、貧しい中学生でも買える安値だった。徳富蘆花は有名な「不如帰」の作者とは知っていたが、それまで読んだことはなかった。思い切つて一冊買って読んでみると、その頃夢中だった林不忘、大佛次郎、江戸川乱歩などの小説と変わらない面白さでぐいぐい読める。すっかり蘆花ファンになつてしまった。捨

て値にかかわらず蘆花全集は店頭に永く売れ残っていた。お蔭で小遣いが溜まるたびに買って、「思出の記」、「寄生木」「黒い目と茶色い目」「自然と人生」などを愛読した。出世作の「不如帰」を読まなかったのは、先に売れ切れてしまったからにちがいない。「思出の記」は、中村星湖の「少年行」、山本有三「路傍の石」、下村湖人「次郎物語」、坪田譲治「お化けの世界」と同じように感情移入が心から出来る成長物語だった。しかし、一番心に残つた作品は「寄生木」である。岩手県宮古出身の実在の青年の波乱に満ちた半生の記録といふべき長編小説だ。主人公小笠原善平は、少年のとき上京して乃木邸を訪れ、懇請して書生となり、乃木の薫陶のもと成人して陸軍士官になる。日露戦争では、乃木の旗下で旅順攻略戦を戦い、戦傷を負う。小説の前半の悲惨な戦場のリアルな描写も忘れ難いが、近侍する主人公が記す戦場の乃木將軍の篤実な姿には心を打たれる。乃木は同じ戦場で相次いで子息二人を失つた。戦後になつて、主人公は陸軍部内の情実人事に失望し自ら願つて退役し帰郷する。その結果、恩人の不興を買い恋愛にも失敗し、精神的苦悩の果てに自殺するに至る。この後半の苦悩に満ちた精神軌跡を、中学生の私がどれほど理解できたか分からないが、手に汗握る思いで頁をめくつたのを思い出す。軍神として世

上崇拜される乃木大将のイメージとは異なる、人間乃木の風貌と日常を伝えるドキュメンタリー的な側面を「寄生木」という作品が持っていたことも見逃せない。乃木大将の国民的人気を土壌にして波乱に満ちた時代の激流を越える青年の姿に幅広い読者が共感と同情の大輪の花を咲かせたのが、大ベストセラーになった大きな要因であり実態であつたらう。蘆花とその兄徳富蘇峰には、時代の風潮を先駆的に自覚し、同時代人にアピールして広い支持を集める偉大な思想的ジャーナリストの資質と文才があつた。その一端が「寄生木」の出版的成功にも現れている。「寄生木」の序文で、蘆花は、主人公の青年が本書の原著者であり、四十冊に及ぶ膨大な手記を忠実にそのまま再現したことを記している。その主人公を一生の別れとして見送つたのが、現在の蘆花恒春園隣接の八幡神社社頭であつた。蘆花の千歳村粕谷移住の生活記録といふべき「みみずのたはこと」に「わかれの杉」という章があり、早春のある日、主人公小笠原善平が突然来訪して蘆花と夜を徹して語り合い、翌朝雪のなかを八幡神社の別れの杉で見送つたのが、生別の死別となつたと記している。その半年後に青年は郷里の南部でピストル自殺を遂げた。その自殺を痛惜して「歩んで城東門を出づ 遙かに望む江南路 前日風雪の中 故人此より去

る」の漢詩を引き、別れの杉の下に立つて田圃を見渡すごとに、吹雪の中の黒い外套姿が今も眼さきにちらつく」と文章を結んでいる。じつに蘆花は情の人であつたと知れる挿話である。蘆花に関連して記したいことはいっぱいあるが、別の機会に譲りたい。

芭蕉のかるみ以後 (51)

光成高志

道の辺の木槿と山路来てすみれの句の評釈を前号で残したので、ここでそれを試みる。和漢の膨大な私にはそう思える知識が基礎になればこの紀行文の鑑賞はできないと思うけれども、俳句の実作者の経験を生かして考察すれば、先蹤の書の隙間を埋められるのではないかと思ひ勇気を出して踏み込んでみたい。西行の思想的研究書は目崎徳衛の同名図書がありこれを取得した。道元は少し読んだ。荘子も今までの芭蕉の中にあることを知つた。源氏物語は今まで60年かゝつて今も読書中にある。今は便利なことに栗田勇著の芭蕉が最近までの芭蕉研究書を網羅されて、氏の宗教的史観や西洋の詩論を踏まえた独自の図書を出版されておりこれも並行して愛読している。その中では尾形仿著の野ざらし紀行評釈を参考にされ、両氏とも甲子吟行画巻を底本として解釈されている。これらの文献を引用した部分と自説を混成して書いて

たので、筆者の独自性は何だと言われそうであるが、皆自分のものとしたと理解され、ば幸と思う。馬上吟「道のべの木槿は馬に食はれけり」は初稿では「眼前」と題していたものを「馬上吟」に改めた。眼前は目の前のそのままに描いたと言う意味。馬上吟の吟となると、吟詠するとかの意味が濃くなり『文選』には「吟はナホ詠のゴトシ」と注され、又『詩人玉屑』には「悲、蛩蛩（こおろぎとひぐらし）ノゴトキヲ吟トイフ」と注されているという。芭蕉が眼前を馬上吟に改めたのは次にくる「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」の小夜の中山での句との映りを良くするとともに、吟の字に旅情を表したのである。原文をよく読めばこの映りや旅のころ、つまり旅情がよくわかる。朗誦するとより明らかである。馬上吟 道のべの木槿は馬にくはれけり、二十日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらくきに、馬上に鞭をたれて、数里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りて忽驚く。馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり と続く原文は気持ちよく朗誦できる。三冊子にある馬上眠むからんとして残夢残月茶の煙を、馬に寝てと上五を変え、後句の拍子がわるいので、月遠し茶の煙と直されたという。これも今では誰もが納得できる推敲である。元に帰って、木槿の句の季語は木槿で、梅薫抄などの芭蕉以前

の季寄では8月あるいは7月に挙げられているとか、槿花一日の榮の花はこの木槿の花を指し、朝に咲き夕にしぼむ。私のスポーツクラブの駐車場口に大きい白木槿があり毎年季節感を呼び覚ましてくれる。今五月は若葉まだ花はない。白木槿は私には真つ白いブラウスを着た若い女性の姿が思い浮かび見下ろし見上げて通る。中心の赤いものは底紅と云われ、以前孝三さんがロシアの潜水艦事故に取り合わせて詠われたのを覚えている。素堂がこの吟行の秀逸なるべけれと評したことは既述した。弟子の許六は歴代滑稽伝（二七二五）の中に、談林を見破りはじめて正風体を見届け、躬恒・貫之の本情を探った句と推量している。『芭蕉句選年考』（二七八九〜一八〇二）には次のような説を挙げている。芭蕉の禅の師仏頂和尚が、俳諧の如き「綺語怪詞何の益ありや」と戒められた時、芭蕉が「俳諧は只今日の事目前の事にて候」と答えた時の「即吟」である。仏頂は「善き哉々々俳諧はかゝる深意あるものにこそ」と感じて、後は芭蕉の俳諧をとめなかつたというのである。古典文学大系ではもとよりこの話は信ぜられないが、この句には確かにこの問答にあらわれたような禅機を読み取ることができるとしている。この句には古来、槿花一朝の夢とか出る杭は打たれるの寓意を読み取るがいずれも採るべきではないとして

いるのも同感である。眼前属目の景にはっとしたという見方を素堂もしているのだ。ところが、尾形仿著の評釈では、「山路来て何やらゆかしすみれ草の句も、単なる叙景句ではなく、日本武尊の白鳥陵に対する挨拶や、木下長嘯子の風懷との交響の上に成り立っていたとする。同様にこの木槿の句も漢詩文の世界に片足にふまえ、それを乗りこえようと試みつつあった貞享当時の吟として見る時、そこには平明な自然觀照の背後に、何らかの負数的な趣向の存在が想定されなければならないだろう」とする。謝春卿の野梅の詩にある馬上で聞いた暗香すなわち梅の香を打ち返したものであるうとすると、木下長嘯子の道の記にある馬の食み残しつるあさ草の「パロディ」とか、果ては野口在色の世間の功名木鴈モウガント看ルとの心なるべしという庄子の引用であるという三つの見方をしている。筆者はこれらをペダンチックという勇氣はないが、芭蕉の心を想像することはできる。紀行文を書くに当たってその時々感動を省略を効かして文を構成していったのだ。作品になっているのだから、文献の引用ではなく、身から自然に発散するほめかしである。英語でいう allusion である。この手法は源氏物語に於ける式部が結構沢山やっていることで天才的頭脳が融通無碍にでて来た結晶のようなものであろうと思う。紀行文書

かれなかった空白の時間の方が多くではないか。紀行文の行間を思うべきである。言葉にされていない間を思うべきである。考えながら歩いて歩いてその時の感動が残像としてあり、それを構成して紀行文にまとめたのであって、皆芭蕉の記憶の中の表現なのだ。芭蕉が先の引用のことを聞いたら又「予が方寸の上に分別なし」「眼前なるは」と言われるのではないか。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 元号が平成から令和にかわり何か日本列島そのニュースばかり、昭和から平成になった時はそんなに大々的な放送もなかったと思う。天皇が生前退位された為だろう。自分も思わず平成を振り返ると落ち着いた平成ではなかったな。二年から16、18年と義父母そして妻もあの世へと送り楽しい記憶はない。後半の10年は一人暮らしになり、自分の思うままに生きて来た。まだこれからも続くだろう何時までか分からないが。今まで行って来た事を続けようと考えている。「遊行期」とは人生の最後のしめくりである死への道行きであるとともに幼い子供の心に還っていくつかしい季節である。旅とは行きっぱなしのことではない。旅立った者は帰るのだ。登山とは山に登ることだけではない頂上をきわめた

あとの人は必ず下山してこそ登山という行為が完結するのだ。この世に生を受けた人間はちゃんと世を去ってこそ人生である。老いてゆく自分は子供の還っていく人間の自然なすがたである。子供に還り赤ん坊に還るやがて誕生した場所へ還るそれを死というのである。老いていくことは枯れていくことではない。それはいきいきした好奇心と未知の世界へむけて触手をのばす生命の活動である。ボケルというのは幽玄の世界へ近づいていくことだ。知っていたはずのことを忘れてしまうのもそうだ。

わがままになるのも赤子に還るすがたである。体が不由になったと嘆くことはない。赤子のときは這って動いていたではないか。二足歩行すらできなかったのだ。人の手を借りなければ日常の生活ができないと訴える気持ちはわかる。しかし生まれて数年間は他人の世話にならずには生きていけないのだ。幼子はすべてそうなのだ。自分のこととして書いた。令和二年は90歳になる。まだまだ逝きそびれている。白金葎4月号を読みながら思うがまゝに書いてしまった。まだ車に乗れるので好き勝手に生きているご安心下さい。思い浮かべて書けばいくらかもあるがカートリッジがなくなった。二人とも体調に気をつけて元気でいて下さい。韋巖さま ㊦健二

令和の幕が明けより早くも三日となりました。平成に

頂いた白金葎とプレゼントのお礼が今頃になりお許し下さい。四つ葉のクローバは「幸」のシンボルよくぞ見つけられましたね。そして葉が大きくてオドロキです。最近テレビでどこかで（見落としました）四つ葉のクローバの栽培に成功したところがあるそうでそんなに沢山作ってどうするのでしょうか。ある筈のないものを探したり、たまく発見したりが楽しく価値あるものではないかと思いますが。お代替りの群衆の加熱ぶりもオドロキです。四代目に踏み込んだ老いの目は冷めて眺めるのみです。

97号の表紙は意表を衝かれました。白金葎はとも元氣そうで右下は手賀沼でしょうか、水あり舟あり沢山あるのは葎？さわやかな表紙でした。手賀沼ですが、印旛沼とか千葉は海もあり水がいろいろ眺められるところでですね。野鳥も私共の近くで見られない水辺の鳥が見られ、うらやましいです。我孫子日記何れのお句もうなずくものが多く己が詩囊の貧しさにがっかりしております。我が家に来て四十雀のためのひまわりのタネを大量に食べ、ワカケホンセンインコの羽根と四十雀のピンバッジ同封いたします。ピンバッジは日本野鳥の会のその年に作っている野鳥の中の一つです。蘆花恒春園の吟行句今から楽しみにしています。十代の頃蘆花の美文にあこがれ今もいくつか暗誦できるところがあります。ついつい

のおしゃべりお許しを。光成主宰とみち様 (5.3 璃子)

SOAでの指喉を真に受けて蘆花について拙文を草してみました。匆匆の作で冗長感じがきになります。斧鉞は主宰にお任せします。 (5.14 健二)

新緑が美しくしのぎやすい季節となりました。お元氣でお過ごしでしょうか。白金蔭四月号有難うございました。表紙に私の絵の写真を載せていただき恐縮しています。いつも多くの方の俳句などを読ませていただき感謝しています。この時期「目には青葉山ほととぎす初鰹」がびったり合う季節です。野に山に出かけていきたいと思えます。ご自愛ください。 (5.11 昇)

風薫る五月となりました。喜んでいる日が多ければ有り難いこと、令和になつて、もう大雨被害を心配するところもあり、自然災害は逃れようありませんね。私共の句会もそれぞれの句風が定着した感じでなかなか面白く思えます。菖蒲の興はともかく箴は平家の公達の雅で源氏とは違うことが何か悲しく歌もいくつかあり歌いました。箴も歌の中に出て来たので、昔の歌は歴史や地理を歌いこみよく出来ていたと思います。歌詞は平成生まれさんには難解が多いことでしょう。反戦歌と思えるようなものもありましたつけ。五月の残り半分をさわやかに (5.14 璃子)

前略いつも大変お世話様でございます。体調不良のまま五月の例会が近づきました。欠席投句させていただきます。よろしくお願いいたします。十七日は親友の脊柱管狭窄症お手術に当たり病院に出向きますので欠席させていただきます。 (後略) (5.16 正美)

爽やかな5月の句会でありました。歳とつても皆様お元氣で明晰な様子嬉しく存じます。(小生は少し怪しいけれど)。今年の団体展も何とか終わりました。拙句、「蛾の生れてペットボトルに羽音澄み」についてちよつと弁解させて頂けるなら、昨年9月に道で拾ったイモムシ、ペットボトルの中で蛹となつて冬を越し、忘れていたところ、去る5月6日の朝、7ヶ月ぶりに羽化しボトルの中で飛んで居りました。最近の感動です。セスジズメ(背筋雀蛾)という普通種ですけれど。ところで先日渡して頂いた中原道夫氏の素晴らしい句集 興正氏からということで御礼申したくご住所教えて下さいませんか。それではまた。 (5.19 陽二)

(描写が細部に入りすぎではありませんか。雀蛾がペットボトルの中で育ち羽化したと言うだけで俳句になりますよ。)

五月句会は楽しかったです。一句鑑賞を送ります。

(5.19 健二)

我孫子日記

	4/19 例会
	4/20 小川純子講演会
	4/24 SOA
	4/28～29 山焼塾
*1	5/5 SOA
*2	5/8 SOA
	5/11 新宿源氏物語
*3	5/14 北総病院
	5/15 SOA
	5/17 例会

*山焼きや所々に雪残る

黒文字茶喫す山焼塾に来て

彩雲の真中に春日ありにけり

雪残る朝日岳見ゆ桃の花

雪解水三重奏なる野川かな（みち）

屋根赤き民宿の道遅桜（〃）

山焼や女人もゐたる点火隊（〃）

山焼果て子らの群がる消防車（〃）

山焼の煙斜面をなぞりをり

山焼や着火隊ゐて鎮火隊

末黒野に焼け残りたる萱の筋

山焼や溶岩流の岩残る

黒文字のみどりの若芽山の道

白樺の皮の剥がれて吹かれをり

千メートル下れば桜満開に

*光透く墓石の上の若楓

俳優志道塾有小手毬の花

小手毬や太り過ぎたる猫二匹（みち）

太陽てふ紅き石楠花花終る

*新緑の北総をゆく連絡バス

編集後記

メールにて稿を受けることができたおかげで、はや後記を書く段になった。台所のみちさんがあまり書かなくていいよと言うもんだから、璃子さんの真似をして、来月6月21日にお会いしましょう。ではごきげんよう。

白金霞五月号（通巻第九八号）令和元年五月二十日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・二二一九 我孫子市蘭新本二四・二七

表紙の題字…加納綾女 同写真は今和元年五月十八日の白金霞